

増淵勝一著『平安朝文学成立の研究』

河北 勝

昨年四月、増淵氏の標記の好著が刊行された。これは、文字通りの力作であって、秀論の名に恥じない幾多の論文を収めて、体系化された一書である。全体を、平安朝の代表的作品の成立の研究・成立時期の考察という一点に統一したのは、さすがに見事な見識であると思う。

その考証の手法は、本書に収むる所十八編の論文中には、勿論精粗の差はあるものの、概して、非常に手堅くケレン味がなく、誠実その物であって、深く掘下げて其の作品成立の本旨に迫ろうと努力している。それだけに極めて読み応えのある一冊となっている事も確かである。又、広く関連文献や希観書などにも、よく目を通してある点も書中の随所に於いて、驚嘆させられる程である。

なお、この種の専門書によく見られる所の、注や補注などを、すべて論文末に羅列するような煩雑な事をせずに、本文中に全部組入れている所にも、読者への配慮がいたく感じられる点なのである。このように真摯さに満ちた本書が、幾多の創見を盛り込んで公刊された事は、学界の為に大いに悦ばしい事である。

では、本書を反覆披見して教示を受けた多くの問題点について、以下順序を追いつながら、具体的に紹介・批判を加えてみたいと思う。

(一)竹取物語の世界 この論文は、要約すると、つまり竹取物語の成立時期は、夙に岡一男氏の論じた通り、清和朝の貞観末年から陽成朝の元慶二、三年の頃であつたろう事と、作者として最も応わしい存在は、僧正遍照の他にはあるまいという二点に帰する事ができるであらう。竹取物語の文学史的位置や執筆意図、人物造型など種々の事が多く述べられてはいるが、詮ずる所は、この物語の本質に、伝統的な説話の骨格構造を見ようとする片桐洋一説に対して、岡一男氏の如上の二点を補強追認しようとした一編であると言えよう。

民俗的・説話的な「成立の場」ではなくて、むしろ個性的・作家的な立場での「執筆完成」という事の考察であると思う。

(二)大和物語の成立年代すでに定説化していると思しき「大和」は天曆五年頃の成立かという阿部俊子氏の学説に対して、再検討を試みた所の論文である。即ち、本論文の述べる所は、大和物語は後撰集よりも後出であらうこと、現存「大和」は円融帝の天禄初年から、天元五年以前の十四、五年間の成立であらう事の二点を力説されている。

論中、その人物考証は詳しく緻密であり、その論旨には説得力が頗る豊かであり、この著者の本領を発揮して成功した好論の一つであって、読者に或る力強さを憶えさせるような一編である。幾人かの国語学者たちから、大和物語については「多元的成立

論」(著者の用語)が嘗て出された事があったが、斯かる発言に對しても「内容的調査をなごりにする」ことの危険性を高唱する所(本書六六頁)など、大いに共感できるのである。

(付)藤原共政の涙 藤原行成がその「権記」長徳四年九月一日の条で、いたく同情的にその終末の悲哀を詳述している藤原共政についての、これは好個の人物評伝となっている。同年の九月三日、從三位昇叙の夢が破れたままで此の六十才の旧受領は哀しく死去するのであったが、此の共政の人間性、善財型受領の哀歎、官僚組織の壁、当時の社会状況まで細密精緻な筆力を揮つた興趣ゆたかな一文である。この著者のセンスは甚だ豊かに發露して居り、読み物としても、なかなか面白い。そして又、共政のような文化人が数多、平安朝の文芸的地盤を支えていた事も確かだった、という点を訴えたかったものであらう(本書九二頁)。

(三)いはぬし研究 「いはぬし」の作者と思しき増基法師は、一条朝に生存していた事が確實であつて、それ故に本作品の成立は長徳初年以降に落着くであらう、というのが結論であると読み取れる。

早く昭和四十六年に『いはぬし本文及索引』という名著を出している著者であるだけに、本論も非常に力の籠つた、詳細きわまる論考である。特に増基の生存の年代考証は、誠に長大であり博引旁証、微に入り細を穿って、その極まる所を知らないかの如くである。だが、例えば「京極院」の考証や増基の子とか同時代人の説明などは、余りにも冗長であり過ぎて、平安文学専攻の学徒の常識ともなっている事項だけに、煩瑣で「無くもがな」の感が

強いのである。

抑々、考証も又、度を過こせば其れに「淫する」ことに陥り易い危険とか誘惑を秘めているものである。本論文も、神髓は岡一男説の祖述という面があり、それに帰するのであるからには、今少し簡潔直截を望みたいと思う。

四落窪物語の成立年代 古来、その年立の矛盾が常に問題にされて來たし、また卷三と卷四の異質性(断層?)も論じられて來た落窪物語について、それらとは反對に全編同時成立論に立脚し、併せて成立は一条朝の正暦年間から長保三年(一〇〇一)までの十年間であらうと論じた一編である。

論中で本物語の登場人物のモデルとされる藤原道頼(関白道隆の子)、藤原道義(関白兼家の三男)のこと、一条帝が笛の秀れた才能の持主であつた事実が作品に用いられているらしいこと等々が、詳細に述べられている。

しかし乍ら、最も肝要な結論としては、上記の通り極めて簡単そのものである。余りにも自明であり過ぎて、特に言うべき点はない。

(四)源氏物語成立の基盤 この論の要点は、(1)輔尹集には源語に直接影響する歌は全く見出し得ないこと。但し、場面構築には多くの共通性が存すること。(2)為頼集の成立は源語に先行し、從つて影響は多くの歌句の上に指摘できること。但し、紫式部の祖父とは別人であらうこと、以上が結論となっている。

処で、為信集の御番歌について、嘗て今井源衛氏がこれを作者為信の三十五才頃の作であらうとして、「五十才・六十才を想像

すべき必然性はない」と言ったのに反論して、著者は、三十五才より更に更に晩年の作であろうと考えられると言って、異を唱えている（一八二頁）。

然るに、同じ著者が本書の二四二頁では、周防内侍の家集60番歌に關して、これは内侍の二十才前後に作られた物だとし、三十才代に作られた物とすると「いささか年増すぎて興ざめだし云々」と言つて、二十代の作である事に固執しているのである。

なぜ60番歌は二十才代に達しないと著者が言うのか、その必然性が全く推知できない。今井氏の推測は、恐らく恣意的だとして却けた筈の著者が、全く同様な方法に落ちているのではないだろうか。もしそうだとすれば、これは、明かに自家撞著の弊を示したものである。

（付）源氏物語の歴史物語への影響　これは、全体に甚だ力の入った好論である。特に歴史物語作者の源語撰取の態度には「氣鋭の主体性が強く働いているように思われる」との言及は、正に良いかな此の言やと言いたい所だし、又、栄花物語作者の「源語の章句を直接的には撰取しない場面構築の態度にこそ、栄花物語作者の心意氣を認めたかと思う」との発言（一九六頁）には、先人の未だ言い得なかつた斬新で自信ある提言として、心ひかれる所。

但し「大鏡への影響」の項で、大鏡は平安朝前半の男性的文芸精神への直結であるとか、再興であると力説する条（二〇三頁）は、全く賛成しかねるのである。時代性とか、文芸意識の変化発展を全く捨象した論という危険性を、与えてしまうかのような言い方であらう。

（イ）浜松中納言物語の成立年代　成立時期が、古来どうにも明かでない本作品の成立を推定するのに、その根拠となりそうな条項として（一）東宮の立坊年齢（二）衣裳の過差の実態（三）日本と中国の交渉の史実（四）東北地方の情勢、の四つを挙げ、丹念克明な検討を加え、以て推察を加えつつ成立時期を明かにしようとする。しかし、これらが決定的な決め手にならない事は勿論である。

そこで著者は、作品中の引歌の一句が周防内侍集の或る歌の句と同一である点を注目し、内侍の生涯や周辺を緻密に洗い上げ調べ尽す。こうして、浜松中納言は内侍の右歌の詠作時期からして、康平三、四年から治暦四年以前の八、九年間の成立であろうとするのである。

この論の当否はさて置いて、内侍と平親信の姻戚關係を基にして、道隆女が内侍の祖母である所から、栄花物語「浦々の別」の一文と、「玉の村菊」の隆家の大貳拜任の条とを解釈している点は、実に面白く犀利な着想として、魅力的な個所である（二二二頁）。

（ロ）夜の寢覺の成立年代　この論文では、前記「浜松中納言の成立年代」の推定と全く同じ方法が用いられる。即ち、即位の慣例、女房衣裳の実態、夷の觀念、権中納言兼中將という珍しい官位、二月中の除目などを元に、これらの根拠になつてゐる事実の年月日から、逆に作品成立の上限と下限を割出すのである。その結果、「夜の寢覺」は「後冷泉朝の天喜四年十月ないしは康平六、七年以降、後三条白河朝の交ごろ以前の十五年間、下っても承保二年九月末までの約二十年間の成立」だとする。

上掲の五項を根拠にして、果たしてこれ程に細かく（年月までも）限定できるものか否か、そういう方法の適否は今に触れぬとして、あれだけ肌理細かく成立時期を限定する事に、一体どれ程の意義があるのであるか。著者は先に、本書一四六頁に於て、最近では伊勢を始め源語や栄花に至る迄、追筆・後記補入説ばかりであると言ひ、「無邪氣に空想を楽しむのはよいとしても」と難じ、「ともすれば机上の空論に終りがちな成立過程を論じ」て後、「残るものは一体何であらうか」とまで断じた。

今、私は著者の本論考を「無邪氣な空想を楽しむ」ものとは敢て言わぬにしても、他を非のみに終るだけであつてはならないと自戒しながら、この論文を通読したのである。

(Ⅳ)歴史物語の成立　著者は、ここで栄花物語の成立は院政期以後であろうと言われている。それは、全四十巻を同一人の筆作で、同時継続的に著作されたとの考え方を前提とする為に他なるまい。しかし、詳細は茲で論及できないが、栄花物語の初めの三十巻と残りの十巻とは明かに異質であり、従つて別人の筆に依る所の、別々の時期の著作と考えられるというのが、私の現在確信する所であり、大いに異を唱える所以である。

著者は、右の前提に立つ為か、例えば頼宗が「いみじう色めかしうて……御方々の女房に物宜ひ、子をさへ生ませ給ひける」（巻八・初花）と記すのは、必ずや頼宗死去の後でなくては公開できない話柄と思はれると強調する（二七二頁）。だが、当時この程度の事が何故に生存中に公開できないのであろうか。「色好み」という觀念も、男女間の愛の倫理觀も、現代とは大いに逕庭があ

るのである。「栄花の成立は院政期以後」という前提に囚われ過ぎていたのではないだろうか。

(Ⅴ)大鏡の成立年代　これは誠に秀れた良い労作である。先ず、成立年代を論じた竹鼻續氏の論考に対し、よく核心を衝いた適切な批判が示されている。次で歴史学者の赤松俊秀氏との論争でも、精密な調査と力強い論理とで赤松説を却ける辺りは、鮮やかな筆法である。この争いは明かに増淵氏の一勝と言わざるを得ず、こういう国文学畑の好論を史学者も、より一層摂取し参照してほしいと切望する。

既に許された紙数を超えてしまった為、心残りが多いけれどもこの書評の稿を終りたい。本書は要するに、既述の通り精緻適切な考証の営みと、真摯な探求意欲に溢れた成立研究の好著である。数回に亘り熟読する度に、私は多くの教示と啓発とを本書から受けたのである。「序」にある様に、韻文関係での斯かる考察の公刊が一日も早い事を望むと共に、この著者が考証的方法の上に、文芸美の内的理解の面をも具備されて、大成される様に祈りたい。（昭和57・4 笠間書院刊 四六版 三四六頁 八五〇〇円）